

本資料集の内容と特長

- ・本誌は、1913（大正2）年7月から1918（大正7）年8月にかけて博文館が発行した月刊誌。全号揃いで所蔵している機関は皆無という稀覯資料をはじめて復刻。
- ・新中間層の拡大と、それに伴う読者層の多様化により看板雑誌『太陽』が低迷した大正期。本誌では、長谷川誠也（号・天溪）らを中心に、生活困窮や生活様式の改善といった関心から「生活をめぐる啓蒙」が論じられた。
- ・のちの生活改善運動を牽引することとなる婦人雑誌と異なり、本誌の執筆陣は新中間層の「生活」の実態に必ずしも精通していたとはいえず、そのため、「千種万態の生活には皆それぞれの生活様式がある」として幅広い読者投稿を求めるといった試行錯誤が繰り返された。
- ・新中間層の急速な多様化に博文館なりに応えんとした本誌は、大正期の生活改善運動および劇的な生活様式の変容が本格化する前夜、新中間層の経済生活やライフスタイルがいかに多様なものであったかを図らずも映し出した。彼らの暮らしに関わる幅広い研究に今後大いに役立つものである。

博文館刊
『生活』
復刻版（全2回配本）



【監修】久井英輔（法政大学教授）
【体裁】B5判上製・全20巻・総11,000頁
【定価】第1回配本・全10巻＋別冊解題（2025年10月刊行）※分売不可
（第1巻第1号―第3巻第12号）
揃定価（本体300,000円＋税）ISBN 978-4-7601-5607-8
第2回配本・全10巻＋別冊目次（2026年4月刊行）※分売不可
（第4巻第1号―第6巻第8号）
揃定価（本体300,000円＋税）ISBN 978-4-7601-5618-4
全巻電子書籍あり※仕様・価格等はお問い合わせください。

新中間層が急速に拡大した大正期
新たな雑誌読者層のニーズに応えんと
「家計」「生活」を論じた幻の雑誌!!

柏書房

おもな執筆陣リスト

安部磯雄（学者・政治家）	田中義一（軍人・政治家）
泉鏡花（作家）	田山花袋（作家）
井上哲次郎（哲学者）	鳥居龍蔵（学者）
巖谷小波（作家）	永井荷風（作家）
上杉慎吉（学者）	永井道明（教育者）
浮田和民（学者）	新渡戸稲造（教育者）
大隈重信（政治家・教育者）	長谷川天溪（評論家・本誌の発行人）
小笠原長幹（政治家）	福澤桃介（実業家）
尾崎行雄（政治家）	福田徳三（学者）
嘉悦孝子（教育者）	宮武外骨（ジャーナリスト）
加藤弘之（教育者）	矢野恒太（実業家）
幸田露伴（作家）	山路愛山（評論家）
渋沢栄一（実業家）	山脇房子（教育者）
高橋是清（政治家）	コナン・ドイル（作家・翻訳を掲載）
高峰譲吉（学者・実業家）	レフ・トルストイ（作家・翻訳を掲載）

おすすめ先

社会教育史、メディア史、
生活科学、ジェンダー史、
経済・経営史、文化史
公共図書館、大学図書館

書店ご担当者印

柏書房

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-15-13
Tel: 03-3830-1891 Fax: 03-3830-5337

皇族・華族など超上流階級の
当時のライフスタイルが垣間見られる資料として。

『ホーム・ライフ』

全17巻（全2回配本）／B4判上製
各回揃定価（本体285,000円＋税）※分売不可
第1回配本 ISBN 978-4-7601-3276-8
第2回配本 ISBN 978-4-7601-3294-2

上流階級を対象に「生活をめぐる啓蒙」を展開した婦人雑誌として。

『女学世界 大正期』

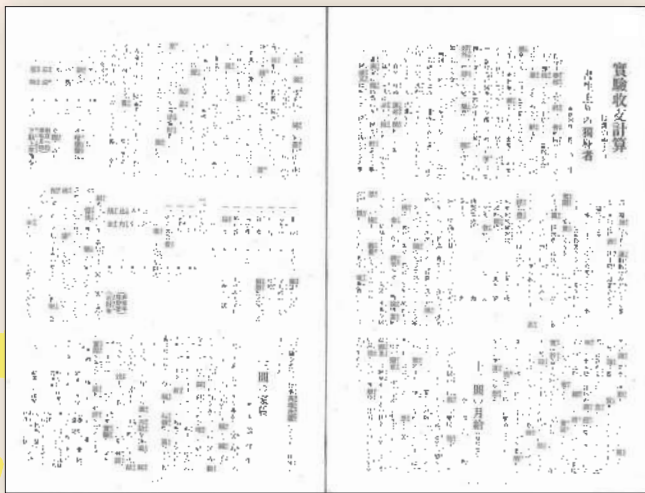
全81巻（全12回配本）／A5判上製
各回揃定価（本体180,000円＋税）※分売不可
第1回配本 ISBN 978-4-7601-4182-1 第7回配本 ISBN 978-4-7601-4686-4
第2回配本 ISBN 978-4-7601-4240-8 第8回配本 ISBN 978-4-7601-4724-3
第3回配本 ISBN 978-4-7601-4319-1 第9回配本 ISBN 978-4-7601-4774-8
第4回配本 ISBN 978-4-7601-4412-9 第10回配本 ISBN 978-4-7601-4879-0
第5回配本 ISBN 978-4-7601-4547-8 第11回配本 ISBN 978-4-7601-4966-7
第6回配本 ISBN 978-4-7601-4611-6 第12回配本 ISBN 978-4-7601-5008-3

柏書房の
関連資料集

URL: <https://www.kashiwashobo.co.jp>
E-mail: eigyo@kashiwashobo.co.jp

郵便振替
00130-2-5234

欧米との生活水準の大きな懸隔をまえに 博文館は「生活をめぐる啓蒙」を掲げ、 拡大する新中間層の日常生活の質的向上をめざす。 のちの「生活改善運動」に繋がる 先駆的な総合雑誌！！



「実験収支計算」(1巻6号)

「千種万態の生活には皆それぞれの生活様式がある」として呼びかけられた読者投稿からは、新中間層の暮らしの実相が垣間見られる。

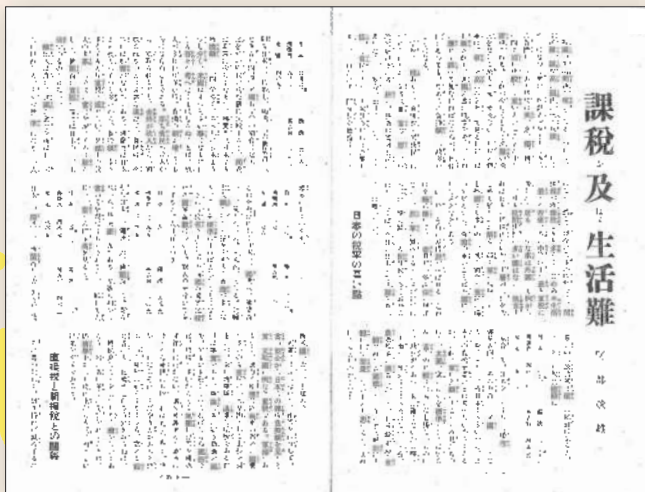


山路愛山「生活は放任主義に限るの説」(2巻5号)

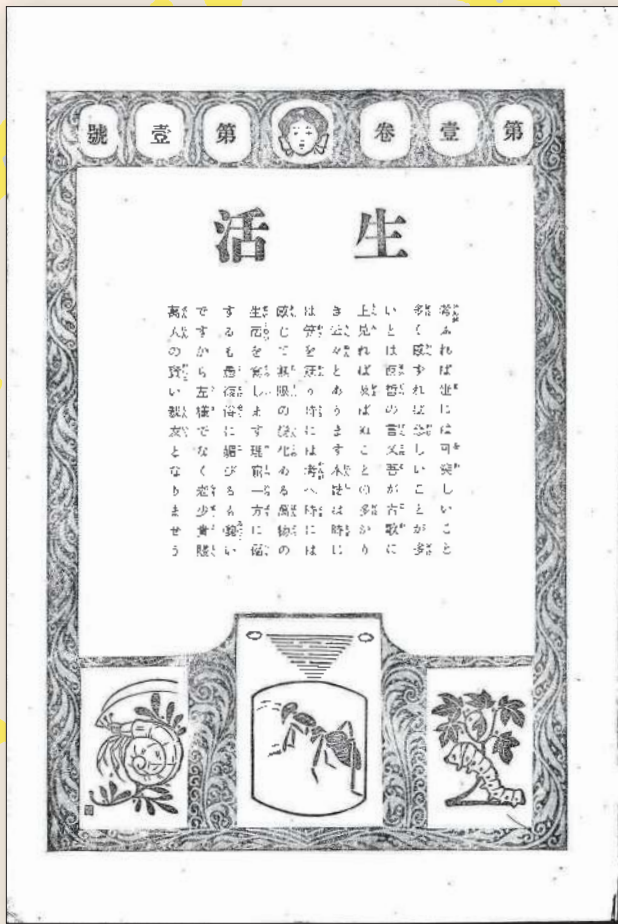
日常生活の向上を掲げる他の記事とは毛色が異なり、生活難は社会の発展による自然な帰結とする論調も掲載されていた。



長谷川誠也(号・天溪)「生活難の救済論」(1巻4号)



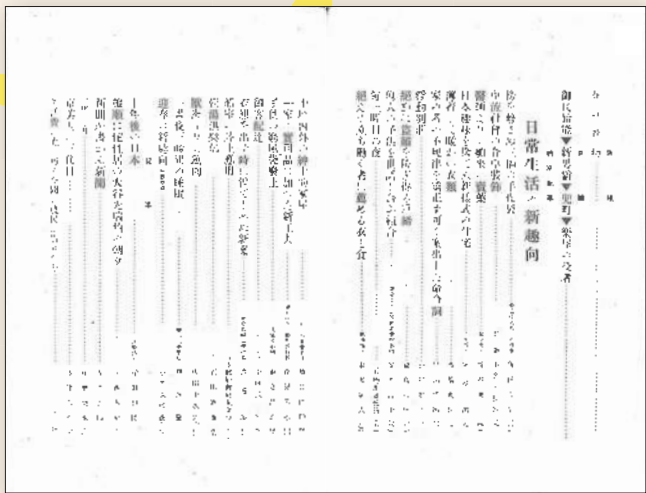
阿部磯雄「課税が及ぼす生活難」(2巻1号)



創刊号の刊行の辞(1巻1号)
市井の人びとの暮らしに寄り添うことが謳われている。



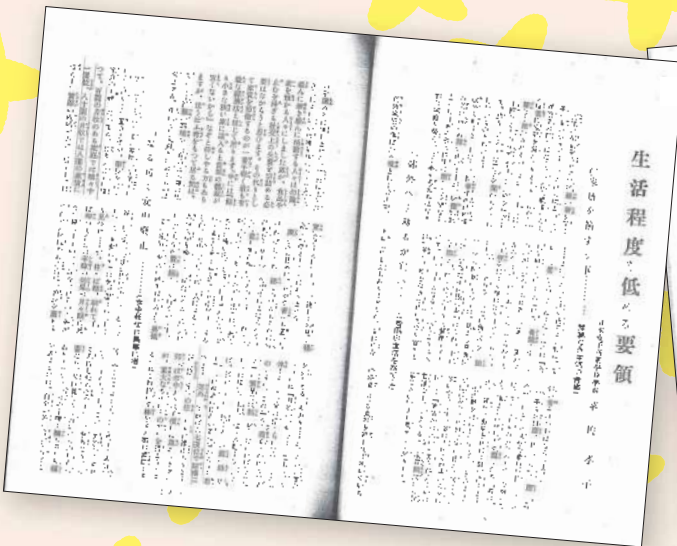
懸賞俳句(5巻8号)
読者参加型の誌面づくりがなされていた。



4巻1号の目次の一部
「日常生活の新趣向」と銘打ち、日常生活の質的向上に資する記事が多数掲載されていた。

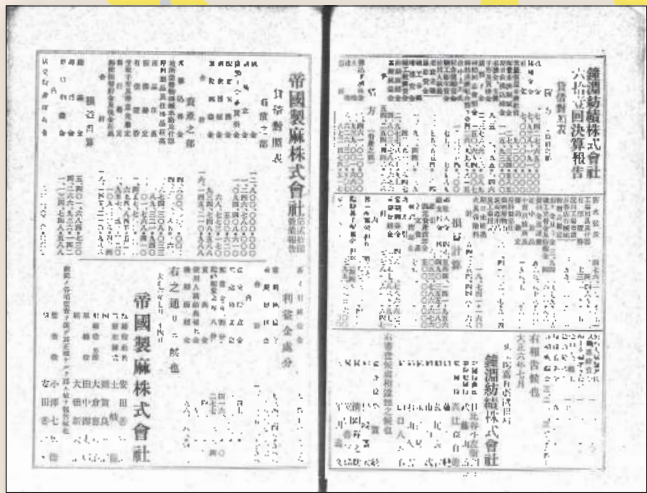


生活程度低減の要領



嘉悦孝子「生活程度を低める要領」(3巻7号)

吉岡銀子「実行し難き」嘉悦先生の生活費低減案」(同8号)
誌面では、著名人による提言に読者が反論を寄せるといった場面も見られた。



鐘淵紡績株式会社など大手企業による決算報告(5巻11号)

『生活』について

新中間層が急速に拡大し、またそれに伴って読者層が多様化するなか、看板雑誌『太陽』の低迷をまえに、博文館が1913(大正2)年に創刊した月刊誌——それが本誌『生活』である。

欧米と日本の生活水準の懸隔を痛切に感じていたジャーナリスト・長谷川誠也(号・天溪)が、みずから中心となって刊行に乗り出した本誌は、そうした問題意識から「平易簡明」「実用文字の豊富」を掲げ、「生活をめぐる啓蒙」を論じる場として世に送り出された。しかしながら、その執筆陣は「生活難」「簡易生活」をめぐる当時の議論に必ずしも精通していたわけではない財政官界や文学界の論客が多数を占め、のちの生活改善運動に深く関わる住宅建築関係者や女子教育関係者らの比重はむしろ小さ

かった。

そのため、婦人雑誌が新中間層内部の格差拡大とその語られ方(言説)の変容に敏感に対応したのと異なり、本誌は家計問題を一応の核としながらも、「生活」問題とは必ずしも密接に関連しない内容が多く盛り込まれ、新中間層読者(特にその中・下層)とのあいだにはギャップが生じることとなる。かくして誌面では、「啓蒙する側」である執筆陣に対して、「啓蒙される側」である読者から反論が寄せられることもあった。さらには編集部が試行錯誤のなかで呼びかけた読者投稿をとおして、社会の主導層であるはずの新中間層が生活難にあいだという実情、および様々な職業にある人びとの声が掬い上げられた。そうして理論・分析の面と実態・実感の面、硬軟種々様々な内容が盛り込まれることで、のちの生活改善運動へと

直接繋がっていった婦人雑誌の影で、新中間層の多様性が誌面に映し出されるという独自性が形成された。

このように『生活』は、新中間層の急速な多様化にゆえんと、家計問題を大まかな核としつつ、様々な職業・社会階層にある人びとの暮らしを網羅的に記述し、その質的向上をめざして大正期を駆け抜けた。そうであるからこそ後世のわたしたちは、とりわけゆり中・下層へと膨れ上がりつつあった幅広い新中間層のリアルな暮らしぶりを本誌のなかに見出すことができるのである。

生活改善運動を牽引した婦人雑誌の傍流として、これまで学術研究においてほとんど忘れ去られていた本誌は、大文字の「歴史」ではない、名もなき市民が紡いだ歴史にも光を当てんとする近年の研究潮流に掉さず、今日的意義のさわめて大きい資料である。